

場の形成と教育

原 野 利 彦

Situations & Education

Toshihiko HARANO

1. 問題意識…一視点からの遠近法から多視点的時空間へ

教育においては「場の設定」が重要な役割を果たすことは言うまでもない。これは子供達が生きる時空間を抽象的次元を越えて、教育的 Situations とすることが要請されていることを示す言葉である。現代の子供達が社会変化に翻弄されて、きわめて表層的な適応しか出来ないとき、教育は彼らに時空間に深く位置付き、深く時空間を生きる力を育てることを目指すべきだろう。しかしやっかいなことにはこれを追及することが一見教育的に見えて実は閉塞させることの緻密化であるかもしれないという疑いを持たせる機会が多すぎる。時空間に深く根付くとはどういうことなのか、と問いかけること自体が或る領域への閉塞を強いることの合理化に繋がることありうるのだ。それは慣習の網の目の中の役割への固定的呪縛ともなりうる。閉塞はイノベーション型慣習への呪縛としてもある。なぜなら近代的な意味での領域は、ただ一つの視点だけを持つ遠近法を尊重するという近代的思考を前提している。時空間を科学的に操作可能な等質的な場として形成したり、実存的場として形成するプロセスをもって、教育的とする考えの根底にこの閉塞型の一視点型遠近法が厳然として横たわっているのではないか、また、これに対する多視点型の主張をみても、やはり一視点型に還元されてしまう思考法があるのではないか…このような問を吟味するのが小論の狙いである。

近代教育は中心となる一視点（例えば教師の眼差し）から時空間を支配・操作できるように、単調な線型リズムの時間性と等質的な基盤目状空間性において営まれることを基調としている。時間割の表、座席表はこれを端的に示してくれる。例えば、座席表の教師の位置は、中心となる一視点を明確に示す（時間割の場合は教師は立案者として背後に隠れたいる）。このパターンは工場的大量生産のリズムと空間をモデルとしている。この大量生産システムのモデルは学校のみならず、劇場の額縁舞台、美術館などの展示方法などにまで影響を及ぼしたのである。むしろそのモデルによって再構成されたと言った方が適切である。

M・フーコーがパノプティコンについて明らかにしたように、近代的学校の時間空間は工場型なのである。この規格化された教育は基盤目状の時間割や座席表によって代表されるような時空間をいわば「地」として、「図」としての教育内容を可能にしてきたのである。その教育的行為は単線型のリズムであり、そのリズムへの子供の馴致であった。勿論、単線型が優勢を占めるに至ったとは言え、多様なリズムがなくなってしまったということ

ではない。一元的な大量生産も歴史的な多様な要素の中で存在してきたのであり、その意味で複線型のリズムという形態も表面上は可能であった。ただ大量生産システムという優勢なリズムへ一元的に還元できるように秩序づけられてきたのである。つまりこのシステムが優勢な社会では、多様なリズムで興味関心を集め、それを一元的な原理に吸収・還元することが求められてきたのである。

このように一元化は生命の興行きを活写する遠近法としてあるのだが、それだけで生命の拡張・深化・深い喜怒哀楽を人々にもたらすとは限らない。多様で細かいリズムを可能にする複雑な分化を時空間に施すことと近代的遠近法とはかならずしも同義ではないのである。勿論、この大量生産の体制のもとでも、単線型のモデルの再生産のみならず、既存の複線型の体制も大量生産の尺度によって再定義され、吸収・継承されていった。そもそも大量生産は単に画一的な製品の上に成立するだけのものではなく、多様な生産物・多様な消費物を可能にし得るものだからである。だからこそボードリヤールは、それを深層での一元性に支えられる表面上の多様化だと断じ得た。そしてそれを表面上の多様性の誘惑によって、一元化した社会へ還元するものとした。しかし「隠れた次元」「隠れたCurriculum」というような、深層と表層を区別し、一元的法則性を見い出そうとする近代的試みは挫折する。物事は表層、深層などの区別を越えて、多様体の迷宮を生みだしている。

この大量生産システムは多様な工程や製品を生み出すが、これらの多様性を概括する力を我々に与えない。日常生活においては状況を単に粗野な有用性のレベルにおいてのみ経験するように仕向ける傾向にある。時空間を規定する場合も、大衆的レベルでのみ定義するようにする。つまり既成のものの方の見方の方を直接経験よりも重視するのである。自ら観察したことが与えられた既成のシェーマに当て嵌められ、両者の不整合は無視されうやむやにされる。かくして世界はますます迷宮化していく。Curriculumとは知性による世界の組織化である。というテーゼが一般図式への還元・単純化と同義になるため、そのような知性では方向づけが出来なくなるのだ。Curriculumは子供の知性を空洞化する。

しかし遠近法を無視する知性を育てようとする努力の方が深い解放感をもたらすとも言えない。たとえば自由をその本質とする子供の遊びや場の設定が子供を生き生きさせるか？と問うこと自体が、イノベーションの常態化としての近代的慣習の推進の網の目に絡めとられてしまうからである。イノベーション物語に子供の成育を当て嵌めていくことを前提にした問いの形と、技術主義的傾向への誘導から逃れることは困難である。

2. 自己内化された大衆的価値観の克服

それでは如何にして自己内化された大衆的価値観を、自覚的に越えることができるのか。これは教育が局所的な状況に深く位置付き、場を作ることを通して深く空間を生きることを可能にするとはどういうことであろうか、と問うことである。これは慣習的思考を破る事の常態化した情報化社会をもって深く空間に根ざすものとは考えずに、これを飼い慣らしの巧妙化として捉えることである。

現代のように我々の状況が刻々と変わることは、表面的な多様化を招くと同時に深層においては一様化をもたらしている。このように大衆化され、等質化された状況下では、し

かも絶えざるイノベーションという慣習によって表面的には刻々と変わる現代の我々の状況は、恒常的なランドマークを不可能にするために、我々はこれに頼るわけにはいかなくなる。多国籍企業の販売店は標準化された看板、店構え、商品、サービスを提供する。

境界線は流動化し、視覚に頼ろうにも等質化されてしまった景観に取り囲まれている。白けきった見慣れた風景がどこまでもついてまわる。区別し求心化するためのシンボルも衰退し、すべてが記号化され抽象化されてしまっている。矢印や頭文字の羅列は、エスキモーのたくさんの白に関する名詞のシンボル性とは大きく異なる。空気の匂い、風の方向の触覚、雪や氷の音を鋭敏に触知しえる状況をもたらさしめないのだ。

伝承文化の時代は象徴性に満ちた景観があった。それは表層を越えて奥深い意味を持ち、住民の愛着を育てていた。現代の景観はそれとは異なり、記号システムになっている。都市や家々は「～時代風」のイメージを表面に貼り付けられ、由緒ありげに見せ掛けられている。しかもこれが「文化」という意味を与えられている。すべては注意をひく程度には取り入れられるが、強烈な存在は毒気を抜かれて行儀良く並列化されてしまう。すべては「問題解決的思考」が可能であるように、解決しうる問題に還元されねばならなくなる。解決不能の問題は排除される。

ここでは人々は Identity を確保することは困難である。その表層の景観は人々の前にはあるが、人々とは無関係にある。しかも「自分を～風に見よ」という押し付けがましい景観の中に住まわざるを得ない。夢の作業としての圧縮などに類する比喩的思考は排除され、曖昧なところが一つもない、オープンで深みのない機能的思考のみを育てる。このような近代的理性による一元的還元では人々は方向感覚を失わざるを得ない。つまりシンボルによる縮減によって己の位置づけが出来なくなるのだ。

我々は親近感と信頼をもてる小世界の中で自己形成してきた伝統社会とは異なり、親しみの持てる世界から追放されて、機能的によそよそしく定義仕直された大世界に住まわざるを得なくなっている。馴染み深い焦点や枠組みの欠如と明白で単純化されてはいるが困惑させる状況の連続をもたらす機能的に定義仕直された世界に住む。確かにこの官僚的消費社会は心地良さと効率的で安全な生活をもたらさしめる。だが、それは深い場所への関わりを阻害し、世界的な規模で平均化しようとするプロセスに地域を巻き込んでしまうのである。

ここで問われているのは分節と Identity の関係、正統的整序能力（慣習）の形成がシンボリックな次元を獲得し、包摂的になれるか、それとも機能的な異質性の排除に傾く一元化なのかという問題であることが分かる。この複雑な世界の縮図を入手し把握する方法はシンボリック的思考か、もしくは機能的思考かという問題なのである。

3. 場の形成＝教育

自己形成は時空間において行われる。かつて多くの国々が固有の暦を持ち、近代の国家主権が領土を持つように、自己は己の活動の場の配置としての時空間を持つ。場の形成は自己形成の強力な拠り所（もしくは自己形成の強力な顕在化）である。自己の Identity の形成を考察するには多様な様々なレベルをもつ場への着目が必要なのである。自己の生物学的身体レベル、自己の所有物のレベル、自己の家族など。まさにラポポートのいう

ように「場を作ることは世界の秩序付けである。」

このように場の形成とは主権や領域を抽出する過程であるが、経験の個々の構成要素が場の Identity を規定するわけではないので、その求心力つまり統合する主体の形成の仕方如何によって場の意味が変わってくる。広大で多様な領域を操作するには、それに相応しい強力な主体が必要であろう。国家や国家間の政治・経済組織に見るように、その主体形成のあり方如何によって領域の広さや領域維持の強度が図られる。この領域は重層的に交錯する。(ちょうど多国籍企業が領域国家を越えるように。)

現代では場の個別性・特殊性は意義をなくし、多様性は均質化へ、具体的秩序は概念的秩序へと姿を変えている。民俗社会では深いシンボリック Identity による場によって自己形成がなされていたが、この大衆社会では表層的、一時的記号の戯れによる定着感のない自己形成が優勢である。(レルフ p. 110) 人は物事を見たり聞いたりしていると思っているが、概括的なもの以外を見たり聞いたりしてはいないのだ。

都市計画などの立案者は場所を単なる位置づけ(ロケーション)として扱うことが多い。それは代替可能なものとして時空間を扱うことである。人々は自分の場、景観を自分自身で作るものというより、専門家によって与えられる代替物と思いつく。この関係の維持、つまり、歴史や由緒というものから切り離された適宜に交換可能な紛い物キッチュの歴史は均質で不毛な記号や物体で人々の生活を取り囲むことになる。

このような場では、人々はテクニクの用語以外の言葉では思考が出来なくなるばかりでなく、それが唯一の言葉であると信じこむに至る。そして偶然性を支配するために科学的研究とそれを強力に推し進める「正義が行われ、暮らしを良くする」中央集権国家を熱望するに至る。感傷的態度を蔑視して、代替案を模索ようになる。いずれにしても技術主義的態度は感傷的な抗議の声の構造まで浸透していくのである。

必要なのは場の感性の復権である。しかしそれは博物館化ということではない。モノをその占めていた場から引き離し、その時その時の歴史意識に応じて配列・展示し、教育機関とすることではない。人々にリズムの多様さと Identity と指針を与える場として、表層的な文化の権威に服従している慣習からの離脱を図るものでなければならない。この目的は設計図や抽象的概念からではなく、具体的で意義深い経験から導きだされねばならない。具体的要素を操作のための単なる変数として扱ったり、固定した視点しか形成しない場は克服されねばならない。愛着のある場所、光や音や感触のある特定の場所の経験からインスピレーションを引き出す場所を作らねばならない。この具体的な場は明確に計画化出来るものではない。しかし、これに向かう努力と条件は明確化出来る。これが教育目的である。意義深い場所に結び付きたいという本源的な欲求の満足を目指すことである。それは人間的な地理学を取り戻すプロセスつまり Curriculum である。

4. 転換期の拡散的エネルギーに形を与える

我々の置かれた状況とは、近代的理性の一元化的傾向から抜け出さねば、転換期の拡散的エネルギーに形を与えることができないということである。旧来の一元的ヒエラルキー的思考に還元されることを脱却し、力を取り戻そうとするならば、我々は断片化、拡散化・並列化を方法化しなければならない。各断片に存在感を与えれば、一元的に焦点化しそう

になる度に拡散的作用をさせることができ、別の展開の糸口とすることができる。

このように考えれば意味の再定義も可能となる。ルーマンに従って「意味」を直接的に体験に現われるものと同時に他の体験可能なものとを統合する体験処理の形式と捉えてみよう。そうするとその都度示されている瞬間瞬間の事象は絶えずひっきりなしに、他の物事を指示していることが意識化できる。今の体験の内容は、そうでないある他のものを常に指示しているのである。

このように意味を「体験の秩序」であり、「体験処理の形式」であると捉えれば、近代の主体への還元、直線的理性による遠近法によって転換期の拡散的エネルギーに形を与えてはならない。近代遠近法は、実体化され孤立化させられた「主体」が所有するための奥行きであった。この意味で遠近法、一点集中の理性中心主義の限界の自覚は、「絶対の不在」、「天の喪失」などとして表現され、裂目深淵を覗くロマン主義などとして起こった。その基調は集中すべき一点の不在、意味の不在としてのニヒリズムであった。

しかしルーマンもいうように、意味を（トートロジカルな展開の出発点としての）主観へと還元してはならない。意味概念は第1次的なものであり、自己意識とは独立して取り扱ひ得るものであるからである。つまり意味は主観概念に準拠せずに規定することができるものなのである。

これには自我ではなくエスの働きを重視しなければならない。カフカのごとく半睡状態で瑣末なことに対して観察を重ねること、まどろみのなかで記憶と想像の混じり合いをさせること、ここに奇想天外な物語が展開できる。ここでは私が考えるのではなく、まさにエスがうごめき始めるのである。このように意味はシチュエーションによって構成されるものである。かつての模写論のように世界の複雑性と意識の複雑性が対称的であると考えるわけにはいかない。たとえばヘーゲルやフィヒテのように意識を反省過程とすることは、境界がすでに知られている場合にのみ可能なのである。しかし意識とは外部世界に対して非対称的に捉えられなければならない。つまり境界設定として捉えられねばならない。

トートロジカルに反省的思考を展覧する主体というものは、すでに境界が知られた世界でのみ通用するが故に「或るものを否定し、より上位の肯定を採る反省」といっても否定する基準が常識（もしくは万人が共有するものと想定された西欧的コモンセンス・良識）にもたれかかったままである。このようなトートロジーを越える否定作用とは否定の際に除外したものを保留しておくという手続きをとる。否定された要素は除外されるのではなく、他の場において復活しうることを前提しているのである。このとき、主体は取り合えずの境界設定をする機能になる。主体とは境界設定をする非連続の過程そのものである。だから異質性の組み合わせから組み合わせへと絶えず飛躍し続けるものである。ここに微細なレベルで生じる権力の関係・駆け引き、抑圧のプロセスを詳細に描く可能性が開かれるのである。

5. 過剰と「外」

上に述べたように、転換期に多様性の問題が顕在化する意味は、体験と行為の可能性が顕在化できるよりも常により多く存在するという世界の複雑性に気づかざるを得ない状況が無数に噴出したことを意味する。つまり転換期とは現実と虚構の差異が不分明になる事

態である。なぜなら体験によって顕在化できる事態を「現実」と思い込んでいた思考法は、その体験そのものを規定していた枠組みの虚構性に気づかざるを得なくなるからだ。人は体験によって顕在化できる事態を遥かに越えたものがあることを痛感する。このようにして体験を顕在性と潜在性とに分化させる思考法が発性した場合に、人は次のことにも気づくようになる。個別性は一般化された図式や規則を越える過剰なものであるということである。そして過剰性が体験と行為の可能性は顕在化できるよりも常により多くの事柄の存在を意味することは、選択の強制の存在を示すのである。

また一般化された図式とは或る特定の期間において「現実性」を僭称する顕在的体験の地平を意味するものに過ぎないものと見做される。それはその地平において指示される他の体験や行為の可能性への期待を可能にするが、それは単に可能性であるかも知れず、したがって期待されるそれとは別様の事態も生じうることを示す事柄、つまり幻滅のリスクと必ず関わり合いになるということを示すようになる。ここに転換期において諧謔が多発する根拠が生じる。

諧謔は思いがけないものを出会わすという特徴を持つが、それは近代的に区分され領域化された時空間において、夫々の囲いに内在する「外」、 「他者」を設定する力を持つ。自らの内部で巧妙に異質のものを出会わせる諧謔は、差異づけがなされ得る境界を模索していく過程であるため、囲いの中心を狂わせ、複数で異質の宇宙の間での基準を巡る戦いの過程でもある。それは裁定を求め、裁定の基準を争う訴訟の過程でもある。問題解決の過程とは本来このようなものであろう。この差異づけを模索しつつ中心を狂わすとは、日常的な瑣末な駆け引き、勘違い、迂闊さなどがすべてのプロセスの内実をなしていることを重視することにも繋がる。「第一次過程」の概念による Freud の「失策」、 「夢の機能」などの分析がウイットに関する研究と関連していることは周知の通りである。

近代学校のカリキュラムは夢の機能に見る第1次過程などを予め意識から排除し（意識を予め還元のプロセスに囲い込み）、他者性や外を排除した。それは大量生産をモデルにした思考法や体験の仕方に馴致するものであった。しかし電子情報の社会では情報テクノロジーが社会の末端まで浸透するために、この還元のプロセスが多元化し、各サブシステムはお互いに一時的で異質な島々として局所化する事態が生じた。国家や政府による一元的な中枢による情報操作は困難となり、社会の各集団やメンバー一人一人が大なり小なり相互の情報操作に荷担するようになる。テレビや新聞、雑誌の情報を各個人が自分流に曲解（解釈）し、意図的もしくは無意図的にお互いに操作し合う。むしろ集団や個人は情報を担う実体としての地位を失うため、操作主体も不分明なものとなる。これが双方向コミュニケーションといわれるものである。この複雑化した過程をシミュレートすることは、益々「現実」を虚構に近づけていく。所謂 Virtual Reality このような社状況において語られる。

6. 迷宮におけるランドマークとしての情報

虚構と現実の境界が不分明になった状況とは、世界が等質化され、平板化されてはいるが多様体の迷宮という様相を呈す事態である。ここにおいては理想や目的、希望などの役割を担うランドマークの代替物を与えるものとして情報が登場する。しかし碁盤目状の方

向感覚の内在化によって効率化を図ってきた大量生産時代の個人は、大量消費の時代においては情報は自らの方向づけを狂わす元凶ともなる。情報は自己の Identity の混乱と世界のカオス化とをもたらすものとなる。情報は真偽、正邪、美醜などの区分を不明にする。

しかし他方で情報は一時的なランドマークを与える。つまり、情報システムは一過性のカテゴリーや価値観を与えるのである。大量生産時代において同語反復的な直線的パターンに馴らされていた人々も、大量消費の時代には情報という目まぐるしい一時的な目印によって方向づけの手立てとせざるを得なくなる。現代の情報技術が非言語的コミュニケーションまで動員出来ることは、それが絶えず変化するランドマークの代替物を提供することに優れていることを示している。このランドマークの代替物を見出す行動のパターンがどのように形成されるのか、という問題が生じる。隠れたパターン、隠れた Curriculum の問題への関心がこの問題の解明への努力を表す。非合理性、無意識へのこのような探索は、情報システムが豊富なオルタナティブを取り揃えることを示す。それは時間的にも、空間的にも巨大で、しかも微細な変化や移動を可能にしうる意識を現代人が持つに至った様相を呈す。例えば、大量消費の時代には人々は、未来や過去の偉大な時代、個人的には幸福な子供時代、長期休暇の思い出、結婚への夢などへ思い通りの時間的移動をする。アイドル、憧れのスターが情報システムを通して空間的にも身近なものになる。

7. 双方向コミュニケーションの多義性

ここに双方向コミュニケーションの回復の主張の意味がある。それは近代の官僚制的なトップダウンのコミュニケーションへの批判としてある。つまり、それは一般的図式と個別的 Situations との相克を表している。

現代では個々人の隅々に至るまで、また末端の小集団めいたものに至るまで、全般化した情報の網の目のなかで蠢かざるを得ない。そこでは末端化された情報の断片すら、互いに自分流に加工し合い、翻訳しあい、意図的に操作し合うプロセスとしてある。しかも誰が送り手であり、誰が受け手であるのか、また操作する者と操作される者という二元的分離が通用するわけではない。その断片や集積は無意図的に様々な動きをする。

広告に瞞されるなどか、誰その悪意に振り回されるなどという主張は説得力を失い、如何にその状況と馴れ合うかということがリアリティを持つようになる。原則・関連性は次々に作り出される欲望らしきものの連鎖の中で不明なものとなり単なる「合理化」という性格を剥き出しにしてしまう。そこではあらゆるものが「雰囲気投機」の対象となり、ウーマンリブも貧困も、闇市的雰囲気も売りものになるようになる。

このような事態が脱出困難な網の目であるのか、それとも切断可能な流動的な粒子の集まりのようなものであるかどうかは解釈次第であろう。個々の断片をどのように並べるのか、または並べ替えるのか、などという問題は旧来の還元的手法、例えば近代的な作者や著者の考え通りに読者が文脈を辿り直すなどという情報操作を越えるものである。例えば国語教科書の設問にしばしば見られるように、「そのとき作者は何を考えたのか？」という問い掛けを越える問題なのである。

突然或る一般図式の中に因われの状態にいることに気づく不条理。また何故にその一般図式に適合することに違和感を感じざるを得ないのかということとを弁明しなければならな

いのかという不条理な状況。判断基準や図式を描くはずの専門機関や法廷らしきものが役割を果たしておらず、別の所で重要な判断が行われているような不分明な状況。官僚的指導や裁定が行われる役所らしきものの奥にある迷路、人間関係（性的関係までを含めて）、秘密の場所、そこで裁定ならざる裁定らしきもの、裁判ならざる裁判らしきものが行なわれること。専門家や弁護士のようなものに頼みに行くことによって引き起こされる事態の矮小化、もしくはすりかえ。人は実効あることをせずにぐずぐずせざるを得ないこと、実効あることをしようとしても不条理で馬鹿馬鹿しいことしか出来ないこと。全体的にこのような馬鹿ばかしさの中にいることの馬鹿ばかしさ。そして最後には分けの分からない結末を押しつけられ、責任を負わされてしまう馬鹿ばかしさ。観劇の時間もないような長時間労働による労働力需要の調節の馬鹿ばかしさ。……このような不条理感、徒労感の中で我々は教育的場づくりに励まなければならないのである。

文 献

- E. Relph, "Place and Placelessness", Pion, London, 1976 高野岳彦他訳, 筑摩書房 1991
A. Moles & Elisabeth Rohmer, "Labyrinthes du vécu, Librairie des Méridiens, 1982
古田幸男訳, 法政大学出版局, 1992
O. F. Bollnow, "Mensch und Raum", W. Kohlhammer, Stuttgart, 1963 大塚恵他訳,
せりか書房 1988